



二星

気仙沼市立唐桑中学校

令和4年度
校長室便り

第4号 7月12日発行

すばらしい！勉強パーティー



6月21日の放課後、生徒会企画として「勉強パーティー」が行われました。

この日は「熊の目撃情報」があったことから、私は午後4時過ぎを待ち、下校する生徒の地区を巡回しようと、職員室から外を見ていました。しかし、一向に下校する生徒の気配がありません。

「登校した全員が勉強パーティーに参加しているのだろうか？」そう思って階段を上がり、教室を覗いてみると、どの教室にも、どの生徒にも、「凜(りん)」とした緊張感が漂っていました。黙々と解いたり、分からない問題を質問したり、タブレットで教科書を確認したりと、それぞれ時間を有効に活用しています。自分たちを律して取り組む、真剣な生徒の姿をうれしく眺めました。

この企画の始まりは6月に入ってすぐでした。生徒会からの呼びかけによって、2、3年生から「リトルティーチャー」を募りました。その後、「リトルティーチャー」がそれぞれ教科を分担して、中間テ

スト対策の問題を作成したそうです。そして当日、まさに「手作りの問題」を解くために、希望する教科ごとに分かれ、それぞれの教室で「勉強パーティー」に臨みました。

これまで、いろいろな学校で生徒会の活動を見てきましたが、このような良い企画はなかなか実現できるものではありません。4月の「歓迎パーティー」といい、今回の「勉強パーティー」といい、唐中生徒会には、「生徒の、生徒による、生徒のための生徒会」という気概を感じます。

問題作成も、中間テストの1週間前までには終えており、おそらく「リトルティーチャー」は、問題を作成する10日間、時間を見つけては「どの問題にしようか、どんな問題がテストで出るだろうか。」と考えながら、教科書や問題集とにらめっこしたはず。つまりこの期間、「リトルティーチャー」にとっても、問題を作成することで出題者の「眼」を養い、「実力」を向上させる絶好の機会となったのです。もちろん、1年生や勉強に不安がある生徒にとっては、勉強のポイントを確認する良い機会にもなりました。

まさに「Win×Win」の企画。「生徒による自治活動」のあるべき姿を見せてもらった行事となりました。



「令和の日本型学校教育」

今、学校教育は、新しい時代に入っています。

「主体的・対話的で深い学びの推進」や「個別最適な学びと協働的な学びの推進」など、もしかすると、保護者の皆様にとっては聞き慣れない言葉かもしれません。



平成においては、授業の多くの場面で「指導」という言葉を用いてきましたが、今は「授業の主語は『教師』ではなく『生徒』である」としています。生徒目線に立って、「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を意図した教育活動を行っています。

その実現のために、今年度は3年生では外部からゲストティーチャーとして講師を招いて学びの機会を何度も設け、2年生でも同様に福祉の学習を進めるとともに職場体験学習を行い、1年生でも志津川自然の家で体験するだけでなく、2日目に震災遺構を訪問しています。

「印象的な場面」

先日、2年生で「職場体験学習事前発表会」がありました。7つのグループがそれぞれ、職場訪問学習において事業所で学んできたことを発表しました。発表をしない他のグループの生徒は聞き手となります。

以前であれば、「発表→聞き手が拍手」という内容で終

わる授業でしたが、2年生は、発表のあとに質問の時間を設けました。

聞き手「〇〇さんは、今回の訪問で、特にどのようなことを大切にしたいですか。」

発表者「はい、例えば□□です。直接交流することで、△△を考える機会にしたいです。」

このような交流です。単に職場を訪問して体験するだけでなく、「学習活動の価値」を確認しています。中学2年生として立派な意見交換です。ところが、ここから更に

聞き手「では、△△を考えるには、課題はどのようなことがあるでしょうか。」

発表者「そうですね……。▽▽を□□していきたいと思います。」

というようなやりとりがありました。質問を重ねたことによって、発表者の考えも深まり、グループの学ぶ目的が更に明確になった場面となりました。

「メタ認知能力」

実は、中学2年生でこのようなレベルで交流できていたことにはかなり驚いています。これは、「メタ認知能力の高さ」があって、はじめて成立するやりとりなのです。この場合、自分と友人との人間関係はいったん脇（わき）に置いて話を聞きます。客観的な立場に立って考え、達成すべき目標のためにはどのように自分が話をするべきか判断して発言しあっています。

仮に、この会話に「メタ認知能力」が育っていない人が入ってしまうと、ともすれば「なんでそこまで突っ込まれるの？」とマイナスに受け止めてしまい、感情的になりがちな場面でもあり、誤解が生まれやすいのです。

かなり高度な、実に素晴らしい意見交換でした。このような交流が、様々な授業で行われていくことが本当に楽しみです。



物事を、立場にとらわれず俯瞰（ふかん）的に見ることのできる力（主観的な考えにとらわれず客観的に判断できる力）



テクノロジーに囲まれた中で

iPhone を発明したスティーブ・ジョブズに関する記事で、興味深いものがあります。
2014年10月9日にニックビルトンという人物が書いた記事です。

「お宅のお子さんたちは、iPadをさぞ気に入っているのでしょうか。」

すると彼（スティーブ・ジョブズ）は「うちの子どもたちは、まだ使ったことがないんだよ。家では、子どもたちがテクノロジーを使う時間を制限しているからね」と言ったのだ。

そしてその後、私はジョブズと同様のことを言う、テクノロジー会社のCEOやベンチャー投資家たちに何人も出会った。彼らは子どもたちがスクリーンに向かう時間を厳しく制限し、学校がある平日はすべてのデバイスの使用を禁じていた。週末にだけ、わずかの時間を与えるというケースも多く見られた。

テクノロジーのCEOたちは、一般的な人たちが知らないことを分かっているようだ。

『ワイヤード』誌の元編集長で、現在、無線操縦飛行機メーカー「3Dロボティクス」の最高経営責任者であるクリス・アンダーソンは、自宅にあるすべてのデバイスに対し制限時間を設け、親が管理するようにしている。

「こうするのは、私たちがテクノロジーの危険をこの目で見てきたし、私自身が経験しているからです。子どもたちには、そういうことが起こってほしくはないですからね」

この記事から8年が経ち、世の中はスマホがなくてはならない時代になりました。

この記事の「若い世代には悪影響だ。自分の子供には制限をかける。」という世界のトップに同意できるとともに、

「これからの時代は必須技術。このテクノロジーを手足のように使いこなせるようにならなければならない」という意見にも共感できる状況です。

実際、学校ではタブレットを用いた授業が行われています。

このような授業は5年前には想像もできませんでした。はるか未来のこのように思っていたものです。

ただ、5年後の予想が難しい現代の世の中にあっても、

「スマホをはじめとするテクノロジーに支配されてはならない。」と主張することはできます。

「支配される」とは、「使用制限について自分自身でコントロールできない。」ということ。

もし「使用を自分の意思でコントロールできない」となってしまったら「依存傾向」であり、重度の場合、登校もできなくなり、社会生活も送れなくなる危険性もあります。

この2年間、コロナ禍により外出もままならない状況です。

その中で、スマホ依存の子供たちがかなり増加しています。

あまりに子供の使用頻度が高く、四六時中掴んで離さないことから、心配した保護者が使用を制限しようとすると、子供が感情的になって暴れたり、親が寝た深夜から朝方に使用を続けたりするケースも珍しくないそうです。

他人事ではありません。どの子供、どの年代にも起こりうる危険性があります。

ゲーム会社は利益をあげることに必死です。

そのために利用者の依存度を高めようと、心理学に基づいた様々な戦略を用いているそうです。

〇日連続ログインサービス、課金で「やめたら損」という感情を持たせる、テレビでCMを流して、頭から離れないようにする。

…… 知らないうちに、子供たちが自分ではやめられない状況が生まれているかもしれません。

「支配されない」ということは、「自分の意思で使わない日を設けることができる」ということ。

我々大人も子供も、「自分はスマホ利用をコントロールできる」ことを確認しなければならないと考えます。

そこで、唐桑地区小中学校長会では、「メディアコントロールデー」を設けることにしました。

別紙のとおり月に1日（第2木曜日→7月は14日）、お子様の健やかな成長のために、さらには、お子様やご家族が依存状態になっていないか確認するためにも、無理のない範囲で、ご家庭でスマホやテレビ等の視聴を制限することに挑戦していただければ幸いです。

「納得解」の社会へ

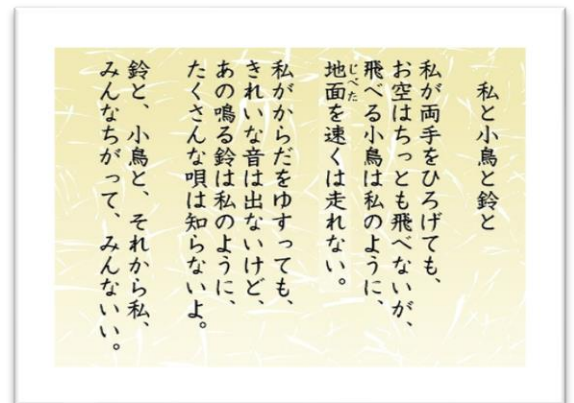
「最善解の世の中から」

昭和から平成にかけての価値観は「最善解」でした。「正しいこと（正解）は1つ」というもの。「私は正しい。だからあなたは正しくない。」という発想で話をしますから、ことあるごとに意見が衝突します。学生運動が起こり、相手を打ち負かすための論戦が巻き起こり、「勝者と敗者」が生まれました。

その中で生活することに疲れた私たちには、昭和の終わりに流行った「十人十色」という言葉が新鮮に映りました。また、平成になってからは、金子みすゞの詩「私と小鳥と鈴と」に心を揺さぶられたものです。しかし、やはり平成の途中までは「勝ち組、負け組」なんて言葉もあり、相変わらず世の中は、「最善解」の価値観のままでした。

思えば、「最善解」の「自分は正しい、あなたは正しくない」という考えは単純だったかもしれません。自分の思い通りに進まないことがあれば、感情を爆発させ、わがままを通せば良かったのです。ただ、そのような考えを押し通す人には、周囲の人が近づかなくなる可能性があります。

また「自分は正しくない、あなたが正しい」という考えも単純だったかもしれません。自分を殺して相手に従順になれば良いのです。しかし、そのような考えを続ければ、精神的に追い詰められ、心が病んでしまう可能性があります。



このような状況の下では、日本人の「自己肯定感」が低いのは当たり前です。

そして、現在、この日本では40歳から64歳までの範囲で、なんと61万人もの人が引きこもりとなっているそうです（日本経済新聞 2019.3.29）。それぞれの人に、それぞれの事情があると察しますが、この年齢層はまさに働き盛りの年代。日本社会にとっては、かなり厳しい状況といわざるを得ません。

「納得解の世の中へ」

今、価値観は「納得解」を目指しています。「あなたは正しい。私も正しい。ではこの目の前の問題をどう解決するか。話し合い、お互いを理解し合って解決しよう。」というもの。

この価値観がかなり浸透してきていることは、金子みすゞの詩が「当たり前」として受け止められていることから分かります。お互いを尊重し、相手の気持ちや立場を考えた社会を作っていくのが当然の流れとなっています。

学校でも「正解はこれだからしっかり覚えなさい」という「最善解」のスタンスから、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかを考えよう」という「納得解」のスタンスに進みつつあります。知識・技能、思考力・判断力・表現力を身に付けるだけではなく、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるものの全てを、いかに総合的に育てていくかが重要だと捉えているのです。

この「納得解」を導こうとする社会、「自分は正しい。あなたも正しい。解決しよう。」は複雑です。複雑ではありますが、「自分が正しいと認めてもらえた」と感じる事ができれば、「自己肯定感」は満たされます。また、周囲と協力する姿勢が浸透すれば孤立は減り、自己主張ができれば精神的に追い詰められる状況も減少します。日本社会が「納得解」を求めているのは、当然と言えるでしょう。

「地域と家族社会の持続」

この「納得解」は地域社会を存続させるために有効でもあると考えます。

私たちが若い頃（昭和時代）は、「都会は素晴らしい。田舎はダサい。」という思考が蔓延していました。都会に住む人が、田舎を馬鹿にする風潮は珍しくありませんでした。その結果、意味もなく目的もなく、都会に流されて住み着いてしまった人のなんと多いことか。

しかしこれからは、

「都会は素晴らしい。田舎も素晴らしい。では、共存していくためにはどうすれば良いか考えよう」という話し合いができるようになるのです。

そのような社会の到来が、私は楽しみで仕方ありません。

ぜひ、ご家庭でも「最善解」から「納得解」へ。

例えば、進路を話し合うにしても、勉強の方法を話し合うにしても、

「自分はこう思う。あなたはそう思う。どちらも正しいね。でも、今はこういう問題がある。どうすれば良いか、いっしょに話し合おう。」

お互いの考えを尊重し合えるご家族の関係を目指していただければありがたい、と考えています。